

ハンドボール競技におけるフローターのシュートヴァリエーションに関する
運動モルフォロジー的研究

飛田 壮平 (1511054)

〈序論〉

○研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボール競技におけるフローターとは、センター・左45°・右45°のことをさし、シュートを打つ機会が比較的多く、チームの得点に深く関わる。筆者はこれまでフローターとして多く関わってきた。しかし、筆者はフローターとしては身長が低く、ディフェンスの上からシュートを狙うことが困難であり、得点をあげるためにはどのようなシュートが効果的であるのか日々悩んだ。そこで、フローターに焦点を当てて、効果的にシュートを決めるためのシュート行為について理解を深めていきたいと考えた。

本研究の目的は、攻撃における個人戦術の中でも、ディフェンスと対峙した際のシュート行為に着目して運動観察し、それぞれの典型的なシュート行為の運動の組み合わせのヴァリエーションを、運動モルフォロジー的に明らかにすることである。

研究方法として、モルフォロジー的考察を用い、自由観察法およびフィルム・ビデオ観察法における印象分析を行うにあたり、他者観察の自己観察化を充実させるために、共同的ゲーム分析を用いる。共同的に印象分析を行うことによって、他者との共通項から間主観的な運動分析を行う。研究対象は、平成26年度全日本学生ハンドボール選手権大会における、上位に進出したチームのフローターとした。学生を対象にした理由としては、筆者自身が学生であること、学生は高度な競技力の仕上げと定着の段階にあり、専門的な領域にあることがあげられる。ここから、フローターにおける攻撃場面で特に1対1の中で放った工夫のあるシュートについて、とりわけブラインドシュートを中心に収集し、編集を行う。そして、実際の運動現象の中から、典型事例となりうるシュートを印象分析に基づいて抽出することで、1対1におけるシュートの構造とそのヴァリエーションを明らかにする。

〈本論〉

第1章 ハンドボール競技の構造特性

ハンドボールのゲーム活動の目標は、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れ、自分のゴールを相手の攻撃から防御することであり、定められた競技時間内にあげた得点の多いチームが勝者となる。どのような攻撃行為もその目標は得点である。その他のすべての攻撃行為は、シュートの準備に役立てられる。攻撃の終決局面では、最も合目的な技術が用いられなければならない。そのためにプレーヤーは、ゲーム状況に応じて正しいスロー技術とスローのための最良の時機を選択できなければならない。

第2章 ゲームの運動観察法について

本研究では、運動モルフォロジー的考察法を用い、その際、他者観察の不可欠な前提となる印象分析を行っている。その中で、ブラインドシュートを観察する上で重要であると考えられるマイネルの運動カテゴリーのうち、特に「運動の局面構造」、「運動の先取り」、「運動リズム」、「運動の正確さ」を用いて印象分析を進めていく。この場合「分類」とは、物事の形・状態・性質などをなんらかの基準に従って分け、個個のものをそのいずれかに帰属させることである。本研究では、フローターのシュート到達までつながった攻撃場面から、1対1状況の中で放ったブラインドシュートに着目して観察していく中で、上記のカテゴリーをもとに、いくつかのタイプに分類していく。

第3章 ブラインドシュートの分類

この章では、平成26年度全日本学生ハンドボール選手権の試合の中で観察されたブラインドシュートを印象分析し、その結果の考察を行いながら、以下のように分類することができた。

| | |
|------------------------------------|--|
| I. ジャンプ・ブラインドシュート ー利き腕側からー | ①オーバースローとみせかけてサイドスロー ②クイック・サイドスロー ③アウト側にDFをひきつけて |
| II. ステップ・ブラインドシュート ー利き腕側からー | ④ステップシュートフェイントから ⑤イン側に流れながら ⑥ゼロステップと同時に ⑦DFに身を隠しオーバースロー |
| III. ステップ・ブラインドシュート ー利き腕と反対側からー | ⑧大きくアウト側にのけぞって |

〈結論〉

本研究では、ブラインドシュートに着目し、運動モルフォロジー的視点からカテゴリー的把握を試みることによって、それらを大きく3つに分類することができた。しかし、どのシュートを行う上でも、様々なポジションでの1対1状況になった際、そのポジションに見合ったシュート、そのポジションだからこそ有効なシュートを瞬時に見極め、対応していくことが必要となる。シュートはどこまでも細分化でき、いくつもの選択肢、組合せがある。その際、ある程度自身の中で実行する選択肢、組合せを決めておく必要があるが、心身が緊張し、めまぐるしく状況が変化する試合の中で、状況に応じた最も良い選択は何であるのかを判断していくことが重要な課題として挙げられる。日々の練習において、運動経過にしっかりと目を向け、自身の運動として知覚することで、競技力または運動技能を高めていくことができる。と考える。

(引用・参考文献小略)